

第4章

盲・聾・養護学校における教育課程の実施状況に関する調査結果の概要

第4章

盲・聾・養護学校における教育課程の実施状況に関する調査結果の概要

I はじめに

本研究では、盲・聾・養護学校における教育課程の実施状況に関する基礎的な資料を得るため、全国の盲・聾・養護学校を対象として、質問紙調査を実施した。本稿では、この調査結果の概要について報告する。

II 調査の概要

本調査は、平成13年度の盲・聾・養護学校の教育課程の実施状況を把握することを目的として実施した。

調査実施期間は、平成14年3月～4月であった。

全国の都道府県及び政令指定都市の盲・聾・養護学校996校に調査票を送付し、675校から回答が得られた。回収率は、67.8%であった。表1は、学校種別毎の回収率を示す。

表1 調査票の回収率

	回収率（回答校数／設置校数）
盲学校	81.7% (58/71)
聾学校	71% (76/107)
知的障害養護学校	65% (341/525)
肢体不自由養護学校	64.6% (128/198)
病弱養護学校	75.8% (72/95)
合計	67.8% (675/996)

III 盲学校における教育課程の実施状況

1. 小学部

盲学校小学部における教育課程別の児童数については、「小学校に準じた教育課程」(215人)、「知的障害養護学校の教育課程」(142人)、「下学年の教科代替の教育課程」(81人)、「自立活動を主とする教育課程」(73人)、「幼稚部のねらい及び内容を取り入れた教育課程」(2人)、「訪問による教育課程」(1人)の順となっ

いた。

図1は、盲学校小学部における教育課程別児童数の割合を示したものである。

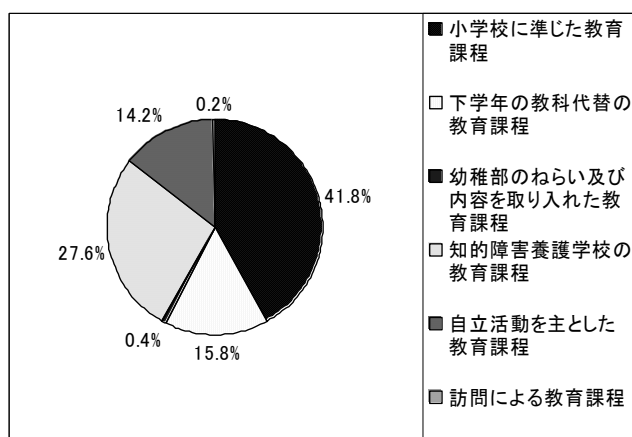


図1 盲学校小学部における教育課程別児童数の割合

最も児童数の多かった「小学校に準じた教育課程」において、平均年間授業時数は、1年生では、「国語」(平均257.79時間)、「算数」(平均138.55時間)、「生活」(平均96.29時間)の順に多かった。6年生では、「国語」(平均188.13時間)、「算数」(平均165.97時間)、「社会」(平均95.08時間)の順に多かった。

2. 中学部

盲学校中学部における教育課程別の生徒数については、「中学校に準じた教育課程」(167人)、「下学年及び下学部の教科代替の教育課程」(67人)、「知的障害養護学校の教育課程」(63人)、「自立活動を主とした教育課程」(47人)、「幼稚部のねらい及び内容を取り入れた教育課程」(3人)、「訪問による教育課程」(1人)の順となっていた。

図2は、盲学校中学部における教育課程別生徒数の割合を示したものである。

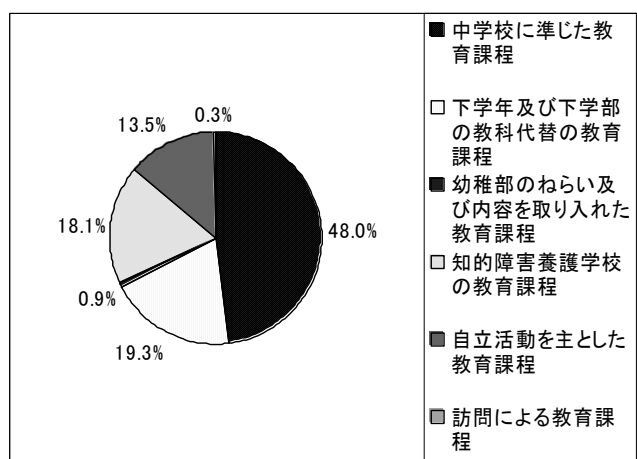


図2 盲学校中学部における教育課程別生徒数の割合

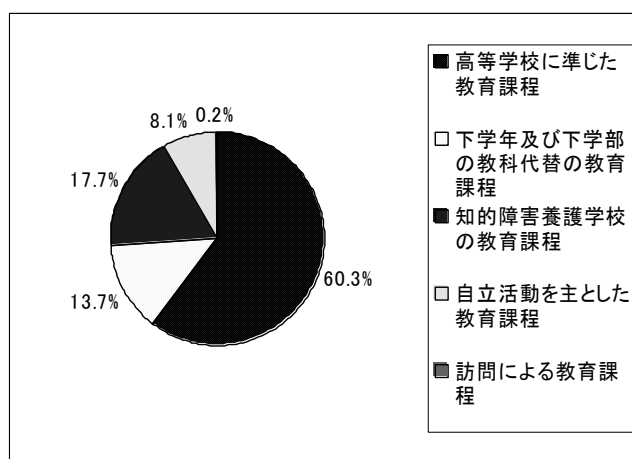


図3 盲学校高等部普通科における教育課程別生徒数の割合

最も生徒数が多かった「中学校に準じた教育課程」において、平均年間授業時数は、1年生では、「国語」（平均 154.74 時間）、「社会」（平均 124.3 時間）、「数学」（平均 107.59 時間）の順に多かった。3年生では、「国語」（平均 134.23 時間）、「数学」（平均 129.04 時間）、「外国語」（平均 119.77 時間）の順に多かった。

3. 高等部（普通科）

盲学校高等部普通科における教育課程別の生徒数については、「高等学校に準じた教育課程」（348 人）、「知的障害養護学校の教育課程」（102 人）、「下学年及び下学部の教科代替の教育課程」（79 人）、「自立活動を主とした教育課程」（47 人）、「訪問による教育課程」（1 人）の順となっていた。

図3は、盲学校高等部普通科における教育課程別生徒数の割合を示したものである。

4. 高等部（専門学科）

回答があった学校の設置学科名は、「保健医療」（41 件）、「音楽」（1 件）であった。

5. 学校全般にかかわる事項

表2は、盲学校における単一障害学級で自立活動以外で個別の指導計画を作成している児童生徒の割合を示す。小学部、中学部、高等部の合計でみると、「各教科において作成」している児童生徒数が最も多く、次いで「総合的な学習の時間において作成」している児童生徒数が多かった。

表2 盲学校における単一障害学級で自立活動以外で個別の指導計画を作成している児童生徒の割合

	小学部	中学部	高等部			合計
			普通科	専門学科	専攻科	
単一障害学級の児童生徒数（人）	168	138	276	180	724	1486
各教科において作成している児童生徒の割合（％）	37.5	26.8	14.1	10.0	5.1	13.1
道徳において作成している児童生徒の割合（％）	18.5	18.8	0	0	0	3.8
特別活動において作成している児童生徒の割合（％）	16.1	14.5	10.5	1.1	0	5.2
総合的な学習の時間において作成している児童生徒の割合（％）	29.2	25.4	15.2	0	0	8.5
領域・教科を合わせた指導において作成している児童生徒の割合（％）	13.7	11.6	9.8	0	0	4.4

図4は、盲学校における学習評価の課題に関する自由記述回答についての分類結果を示す。「評価の規準」をあげている回答が最も多かった。

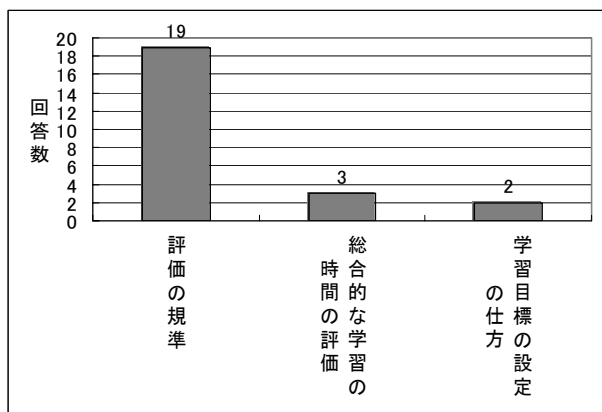


図4 盲学校における学習評価に関する課題

図5は、盲学校における教育課程の課題に関する自由記述回答の分類結果を示す。「個に応じた教育課程の編成」が最も多く、次に「授業時数の確保」となっていた。

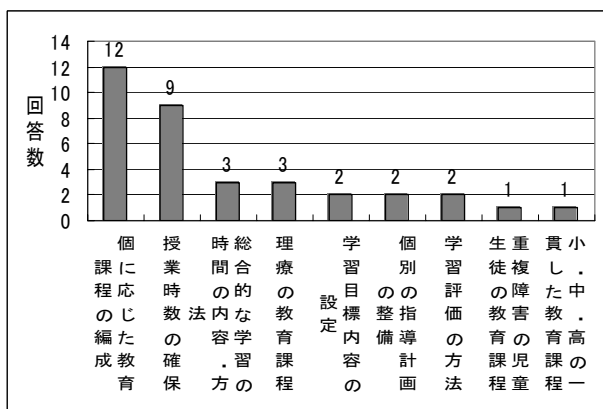


図5 盲学校における教育課程に関する課題

IV 聾学校における教育課程の実施状況

1. 小学部

聾学校小学部における教育課程別の児童数については、「小学校に準じた教育課程」(894人)、「下学年の教科代替の教育課程」(315人)、「知的障害養護学校の教育課程」(165人)、「自立活動を主とする教育課程」(24人)、「幼稚園のねらい及び内容を取り入れた教育課程」(13人)の順に多かった。「訪問による教育課程」についての回答はなかった。

図6は、聾学校小学部における教育課程別児童数の割合

合を示したものである。

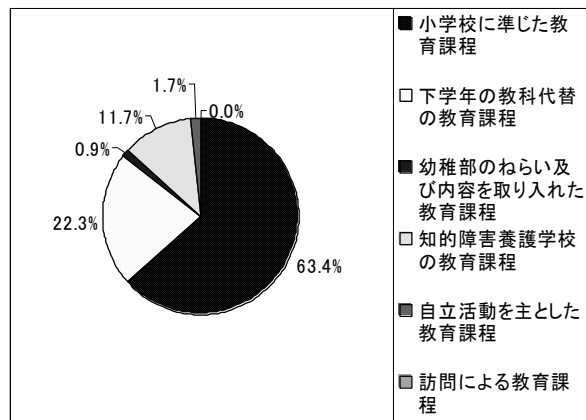


図6 聾学校小学部における教育課程別児童数の割合

最も児童数の多かった「小学校に準じた教育課程」において、平均年間授業時数は、1年生では、「国語」(平均258.04時間)、「算数」(平均140.18時間)の順に多く、6年生では、「国語」(平均198.86時間)、「算数」(平均166.48時間)の順に多かった。

2. 中学部

聾学校中学部における教育課程別の生徒数については、「中学校に準じた教育課程」(610人)、「下学年及び下学年の教科代替の教育課程」(300人)、「知的障害養護学校の教育課程」(115人)の順に多く、「自立活動を主とした教育課程」と「訪問による教育課程」は各1人、「幼稚園のねらい及び内容を取り入れた教育課程」の回答はなかった。

図7は、聾学校中学部における教育課程別生徒数の割合を示したものである。

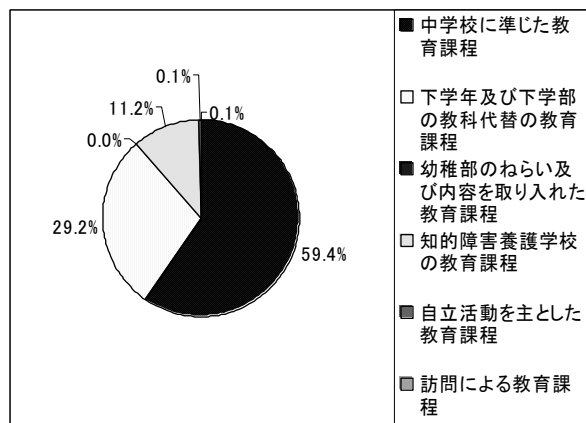


図7 聾学校中学部における教育課程別生徒数の割合

最も生徒数の多かった「中学校に準じた教育課程」において、平均年間授業時数は、1年生では、「国語」（平均 155.93 時間）、「数学」（平均 124.26 時間）、「社会」（平均 121.48 時間）の順に多かった。3年生では、「国語」（平均 145.04 時間）、「数学」（平均 131.96 時間）、「理科」（平均 109.48 時間）の順に多かった。

3. 高等部（普通科）

聾学校高等部普通科における教育課程別の生徒数については、「高等学校に準じた教育課程」（469 人）、「下学年及び下学部の教科代替の教育課程」（64 人）、「知的障害養護学校の教育課程」（51 人）、「自立活動を主とした教育課程」（7 人）の順となっていた。「訪問による教育課程」の回答はなかった。

図 8 は、聾学校高等部普通科における教育課程別生徒数の割合を示したものである。

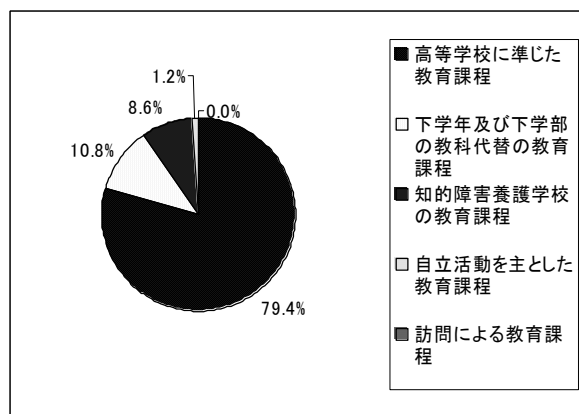


図 8 聾学校高等部普通科における教育課程別生徒数の割合

4. 高等部（専門学科）

回答があった学校の設置学科名は、「被服」(19 件)、「産業工芸」(18 件)、「理容」(16 件)、「機械」(4 件)、「生活情報」(3 件)、「産業技術」(1 件)、「印刷」(1 件)、「家政」(各 2 件)、「情報デザイン」「情報産業」「情報工業」「情報処理」「情報機械」「生活技術」「産業情報」「産業システム」「ビジネス情報」「印刷情報」「印刷ビジネス」「生産流通」「工芸」「造形芸術」「窯業」「アパレル情報」「ファッション」「インテリア」「グラフィックアーツ」(各 1 件)であった。

5. 学校全般にかかわる事項

表 3 は、聾学校における単一障害学級で自立活動以外で個別の指導計画を作成している児童生徒の割合を示す。小学部、中学部、高等部の合計でみると、「各教科において作成」している児童生徒が最も多かった。

図 9 は、聾学校における学習評価の課題に関する自由記述回答についての分類結果を示す。「評価の規準」をあげている回答が最も多かった。

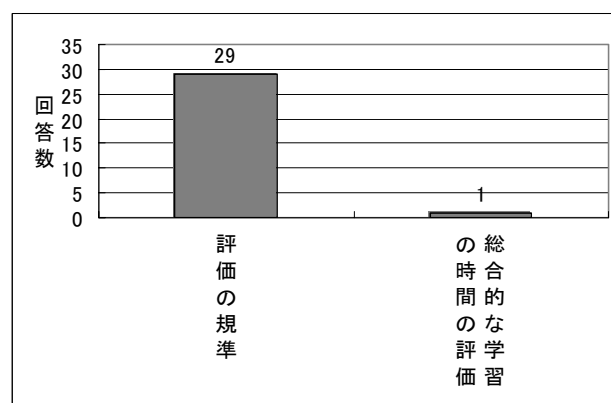


図 9 聾学校における学習評価に関する課題

表 3 聾学校における単一障害学級で自立活動以外で個別の指導計画を作成している児童生徒の割合

	小学部	中学部	高等部			合計
			普通科	専門学科	専攻科	
単一障害学級の児童生徒数（人）	785	570	338	306	235	2234
各教科において作成している児童生徒の割合（%）	23.3	16.1	15.1	18.3	16.2	18.8
道徳において作成している児童生徒の割合（%）	15.0	6.0	0	3.9	3.4	7.7
特別活動において作成している児童生徒の割合（%）	7.0	5.1	5.6	6.9	8.1	6.4
総合的な学習の時間において作成している児童生徒の割合（%）	12.9	4.7	0.3	5.2	3.4	6.8
領域・教科を合わせた指導において作成している児童生徒の割合（%）	3.6	3.9	0.6	1.6	0	2.6

図 10 は、聾学校における教育課程の課題に関する自由記述回答の分類結果を示す。「個に応じた教育課程の編成」が最も多く、次に「授業時数の確保」、次に「総合的な学習の在り方」をあげている回答が多かった。

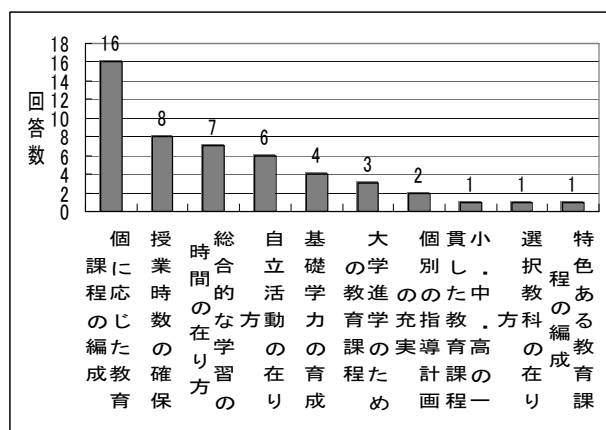


図 10 聾学校における教育課程に関する課題

V 知的障害養護学校における教育課程の実施状況

1. 小学部

知的障害養護学校小学部における教育課程別の児童数については、「小学部の各教科の目標・内容による教育課程」(8861 人)、「自立活動を主とする教育課程」(1531 人)、「訪問による教育課程」(432 人)、「幼稚園のねらい及び内容を取り入れた教育課程」(304 人)の順に多かった。

図 11 は、知的障害養護学校小学部における教育課程別児童数の割合を示したものである。

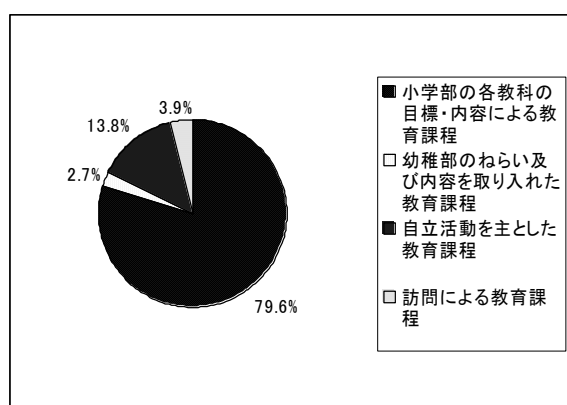


図 11 知的障害養護学校小学部における教育課程別児童数の割合

最も児童数の多い「小学部の各教科の目標・内容に

よる教育課程」において、平均年間授業時数は、1 年生では、「領域・教科を合わせた指導」の「日常生活の指導」(平均 403.97 時間)が最も多く、次に「生活単元学習」(平均 180 時間)が多かった。6 年生では、「日常生活の指導」(平均 375.19 時間)が最も多く、次に「生活単元学習」(平均 244.86 時間)が多かった。

2. 中学部

知的障害養護学校中学部における教育課程別の生徒数については、「中学部の各教科の目標・内容による教育課程」(6663 人)、「自立活動を主とする教育課程」(948 人)、「小学部の教科代替の教育課程」(358 人)、「訪問による教育課程」(223 人)、「幼稚園のねらい及び内容を取り入れた教育課程」(134 人)の順に多かった。

図 12 は、知的障害養護学校中学部における教育課程別生徒数の割合を示したものである。

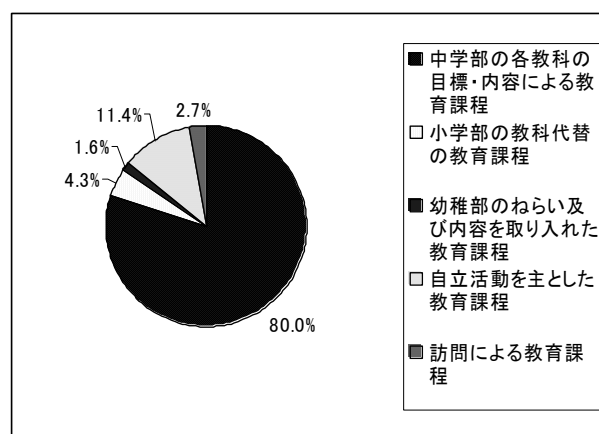


図 12 知的障害養護学校中学部における教育課程別生徒数の割合

最も生徒数の多かった「中学部の各教科の目標・内容による教育課程」において、平均年間授業時数は、1 年生では、「領域・教科を合わせた指導」の「日常生活の指導」(平均 313.5 時間)が最も多く、次に「生活単元学習」(平均 183.35 時間)が多かった。3 年生では、「日常生活の指導」(平均 312 時間)が最も多く、次に「生活単元学習」(平均 192.59 時間)が多かった。「教科別・領域別の指導」の中では、1 年生では「保健体育」(平均 109.11 時間)が最も多く、3 年生でも「保健体育」(平均 107.78 時間)が最も多かった。

3. 高等部(普通科)

知的障害養護学校高等部普通科における教育課程別の生徒数については、「高等部の各教科の目標・内容による教育課程」(12523 人)、「下学部の教科代替の教育

課程」(1463 人),「自立活動を主とする教育課程」(1092 人),「訪問による教育課程」(422 人)の順に多かった。

図 13 は,知的障害養護学校高等部普通科における教育課程別生徒数の割合を示したものである。

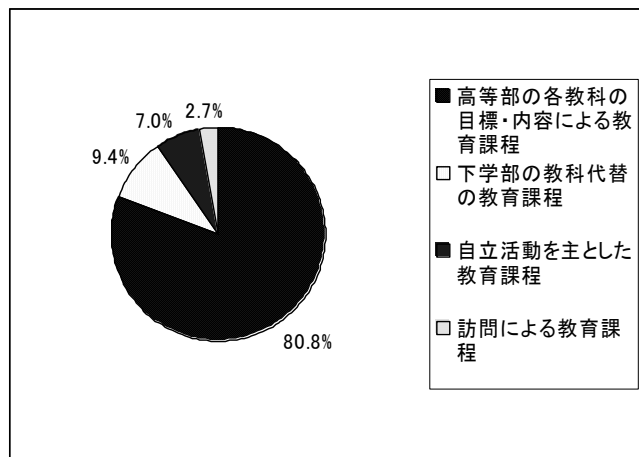


図 13 知的障害養護学校高等部普通科における教育課程別生徒数の割合

最も生徒数の多い「高等部の各教科の目標・内容による教育課程」において,平均年間授業時数は,1 年生では,「領域・教科を合わせた指導」の「作業学習」(平均 303.3 時間)が最も多く,次に「日常生活の指導」(平均 238.71 時間)が多かった。3 年生では,「作業学習」(平均 310.25 時間)が最も多く,次に「日常生活の指導」(平均 233.3 時間)が多かった。

4. 高等部(専門学科)

回答があった学校の設置学科名は,「産業」(13 件),「生活園芸」(4 件),「産業技術」「生活文化」(各 3 件),「木工」(2 件),「家政」「家政被服」「産業被服」「工芸」「工業」「工業技術」「農業」「クリーニング」「食品加工」「家庭」「インテリア」「園芸技術」「生活窯業」(各 1 件)であった。

5. 学校全般にかかわる事項

表 4 は,知的障害養護学校における単一障害学級で自立活動以外で個別の指導計画を作成している児童生徒の割合を示す。小学部,中学部,高等部の合計で見ると,「領域・教科を合わせた指導において作成」している児童生徒数が最も多く,次いで「各教科において作成」が多かった。

図 14 は,知的障害養護学校における学習評価の課題に関する自由記述回答の分類結果を示す。「評価の標準」をあげている回答が最も多く,次に「複数の指導者による評価」,次に「個別の指導計画との関係」が多かった。

図 15 は,知的障害養護学校における教育課程の課題に関する自由記述回答の分類結果を示す。「総合的な学習の時間の在り方」をあげている回答が最も多く,次に「個別の指導計画の充実」,次に「小・中・高の一貫した教育課程」をあげている回答が多かった。

表 4 知的障害養護学校における単一障害学級で自立活動以外で個別の指導計画を作成している児童生徒の割合

	小学部	中学部	高等部			合計
			普通科	専門学科	専攻科	
単一障害学級の児童生徒数(人)	4592	3889	8452	926	62	17921
各教科において作成している児童生徒の割合(%)	61.0	59.7	54.5	53.3	0	57.0
道徳において作成している児童生徒の割合(%)	7.2	7.9	9.2	0	0	7.9
特別活動において作成している児童生徒の割合(%)	24.9	27.0	27.7	6.0	0	25.6
総合的な学習の時間において作成している児童生徒の割合(%)		34.1	31.0	6.0	80.6	22.6
領域・教科を合わせた指導において作成している児童生徒の割合(%)	70.4	67.5	61.1	30.8	19.4	63.1

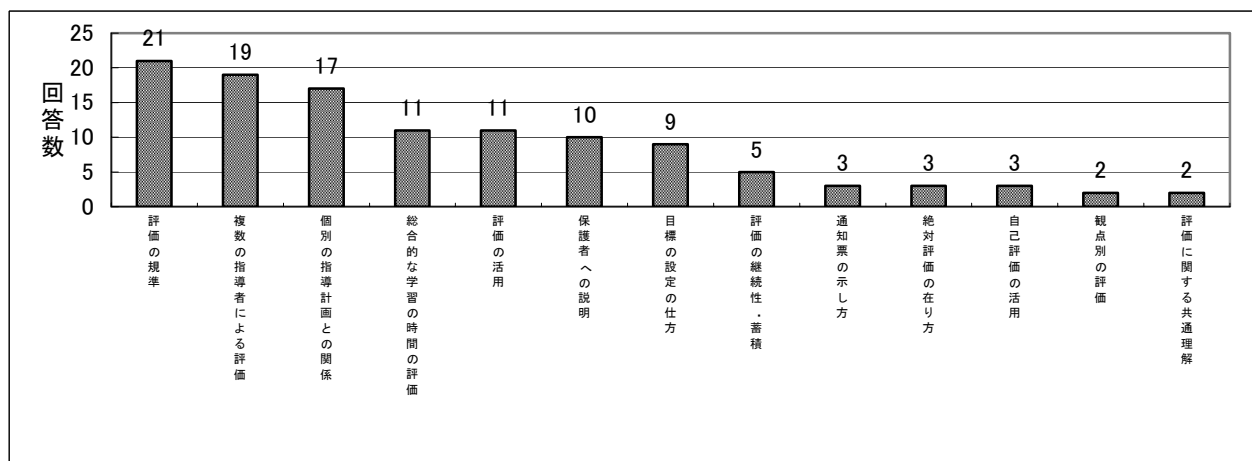


図 14 知的障害養護学校における学習評価に関する課題

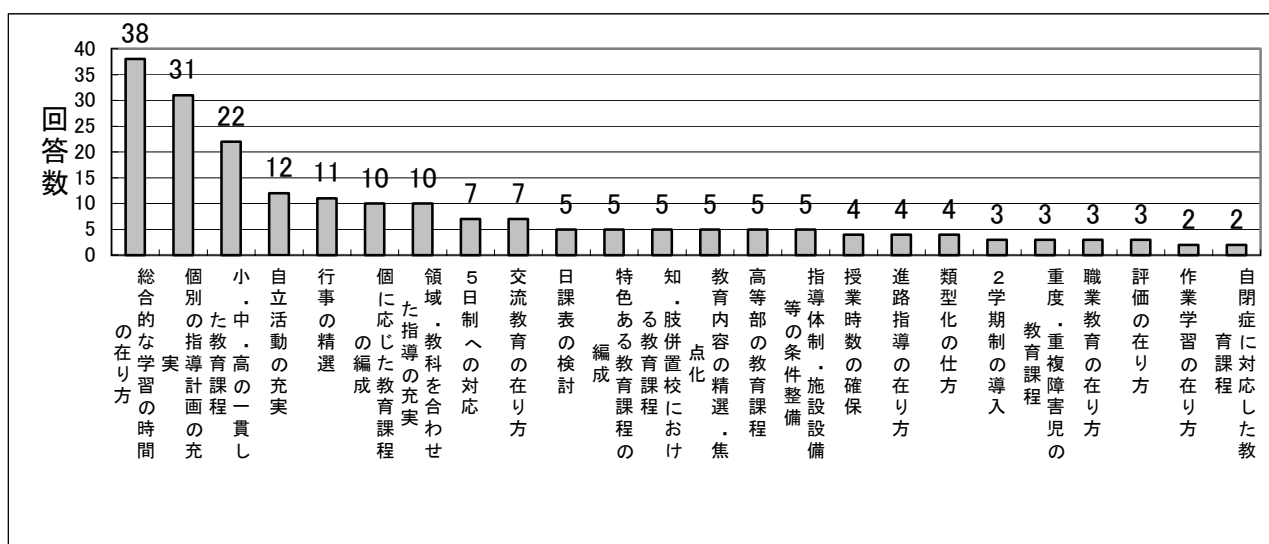


図 15 知的障害養護学校における教育課程に関する課題

VI 肢体不自由養護学校における教育課程の実施状況

1. 小学部

肢体不自由養護学校小学部における教育課程別の児童数については、「自立活動を主とした教育課程」(2426人)、「知的障害養護学校の教育課程」(1334人)、「小学校に準じた教育課程」(478人)、「訪問による教育課程」(299人)、「下学年の教科代替の教育課程」(273人)、「幼稚部のねらい及び内容を取り入れた教育課程」(14人)の順となっていた。

図 16 は、肢体不自由養護学校小学部における教育課程別児童数の割合を示したものである。

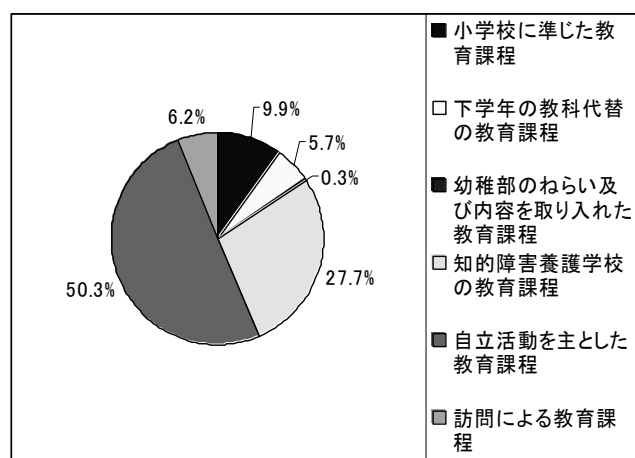


図 16 肢体不自由養護学校小学部における教育課程別児童数の割合

最も児童数の多かった「自立活動を主とした教育課程」において、時間数として最も多い「自立活動」の平均年間授業時数は、1年生で532.25時間、6年生で613.81時間であった。

2. 中学部

肢体不自由養護学校中学部における教育課程別の生徒数については、「自立活動を主とした教育課程」(1140人)、「知的障害養護学校の教育課程」(867人)、「中学校に準じた教育課程」(340人)、「下学年及び下学部の教科代替の教育課程」(241人)、「訪問による教育課程」(219人)、「幼稚部のねらい及び内容を取り入れた教育課程」(9人)の順に多かった。

図17は、肢体不自由養護学校中学部における教育課程別生徒数の割合を示したものである。

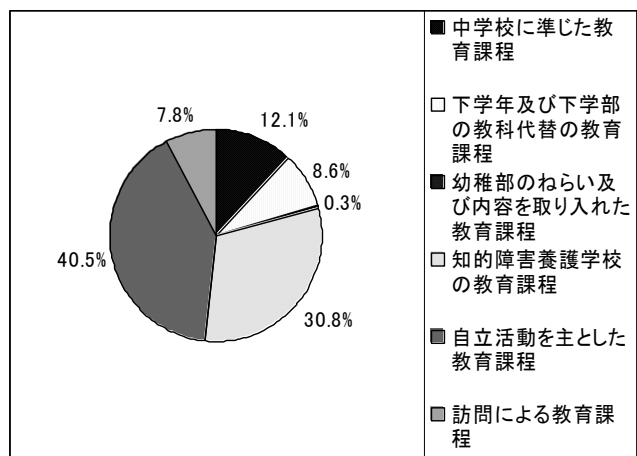


図17 肢体不自由養護学校中学部における教育課程別生徒数の割合

最も生徒数の多い「自立活動を主とした教育課程」において、時間数として最も多かった「自立活動」の平均年間授業時数は、1年生で562.63時間、3年生で576.43時間であった。

3. 高等部（普通科）

肢体不自由養護学校高等部普通科における教育課程別の生徒数については、「知的障害養護学校の教育課程」(1146人)、「自立活動を主とした教育課程」(1062人)、「下学年及び下学部の教科代替の教育課程」(368人)、「高等学校に準じた教育課程」(288人)、「訪問による教育課程」(229人)の順となっていた。

図18は、肢体不自由養護学校高等部普通科における教育課程別生徒数の割合を示したものである。

最も生徒数の多い「知的障害養護学校の教育課程」

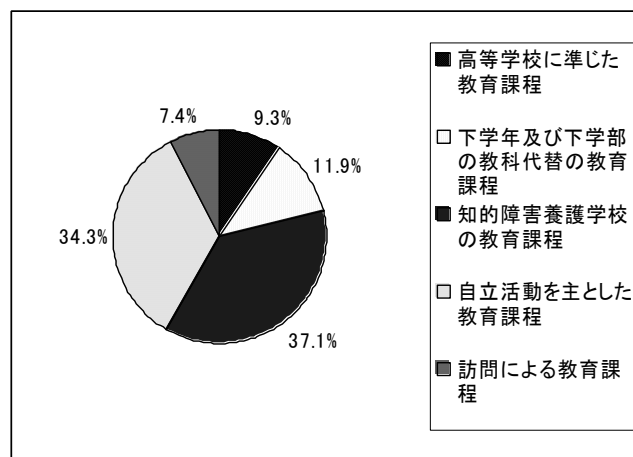


図18 肢体不自由養護学校高等部普通科における教育課程別生徒数の割合

において、時間数として最も多いのは「作業学習」であり、平均年間授業時数は、高等部1年生で206.73時間、3年生で201.4時間であった。

2番目に生徒数の多い「自立活動を主とした教育課程」において、最も時間数として多い「自立活動」の平均年間授業時数は、1年生で576.17時間、3年生で519.36時間であった。

4. 高等部（専門学科）

回答があった学校の設置学科名は、「商業」、「工芸」、「産業工芸」、「生活文化」、「職業科（商業コース・家庭コース）」が各1件であった。

5. 学校全般にかかわる事項

表5は、肢体不自由養護学校における単一障害学級で自立活動以外で個別の指導計画を作成している児童生徒の割合を示す。小学部、中学部、高等部の合計でみると、「各教科において作成」している児童生徒数が最も多く、次に「特別活動において作成」、次に「領域・教科を合わせた指導において作成」している児童生徒数が多かった。

図19は、肢体不自由養護学校における学習評価の課題に関する自由記述回答の分類結果を示す。「評価の標準」をあげている回答が最も多く、次に「総合的な学習の時間の評価」及び「個別の指導計画との関係」が多かった。

図20は、肢体不自由養護学校における教育課程の課題に関する自由記述回答の分類結果を示す。「個に応じた教育課程の編成」、「個別の指導計画の充実」、「総合的な学習の時間の在り方」をあげている回答が最も多かった。

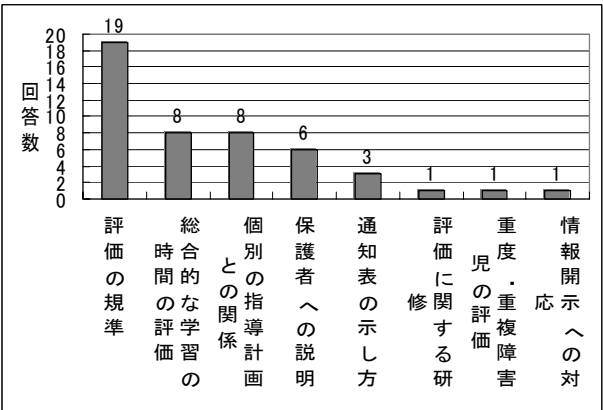


図 19 肢体不自由養護学校における学習評価に関する課題

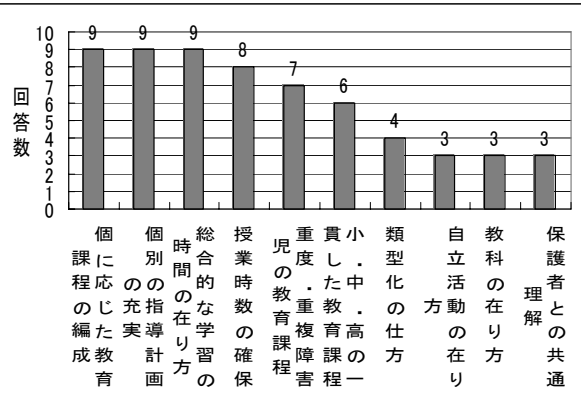


図 20 肢体不自由養護学校における教育課程に関する課題

VII 病弱養護学校における教育課程の実施状況

1. 小学部

病弱養護学校小学部における教育課程別の児童数については、「小学校に準じた教育課程」(497 人),「訪問による教育課程」(165 人),「自立活動を主とした教育課程」(140 人),「知的障害養護学校の教育課程」(136 人),「下学年の教科代替の教育課程」(47 人),「幼稚園のねらい及び内容を取り入れた教育課程」(1 人の順となっていた。

図 21 は、病弱養護学校小学部における教育課程別児童数の割合を示したものである。

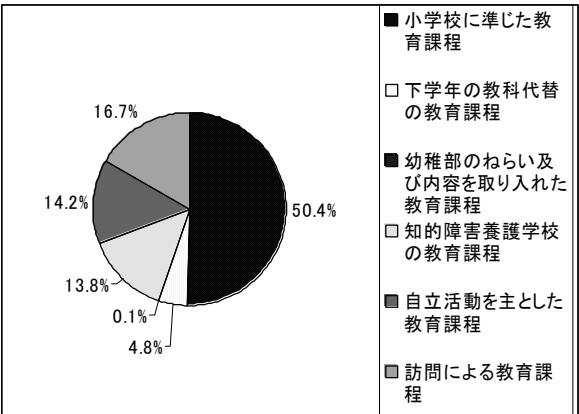


図 21 病弱養護学校小学部における教育課程別児童数の割合

表 5 肢体不自由養護学校における単一障害学級で自立活動以外で個別の指導計画を作成している児童生徒の割合

	小学部	中学部	高等部			合計
			普通科	専門学科	専攻科	
単一障害学級の児童生徒数 (人)	653	509	606	15	0	1783
各教科において作成している児童生徒の割合 (%)	49.3	52.5	53.0	26.7	—	51.3
道徳において作成している児童生徒の割合 (%)	15.9	19.3	4.0	0	—	12.7
特別活動において作成している児童生徒の割合 (%)	40.4	36.7	34.7	0	—	37.1
総合的な学習の時間において作成している児童生徒の割合 (%)	21.3	31.6	35.6	0	—	28.9
領域・教科を合わせた指導において作成している児童生徒の割合 (%)	30.6	33.6	37.8	0	—	33.7

最も児童数の多かった「小学校に準じた教育課程」において、平均年間授業時数は、1年生では、「国語」（平均 268.48 時間）、「算数」（平均 143.67 時間）、「生活」（平均 104.27 時間）の順に多かった。6年生では、「国語」（平均 191.84 時間）、「算数」（平均 165.96 時間）、「社会」（平均 98.97 時間）の順に多かった。

2. 中学部

病弱養護学校中学部における教育課程別の生徒数については、「中学校に準じた教育課程」（571 人）、「知的障害養護学校の教育課程」（111 人）、「自立活動を主とした教育課程」（90 人）、「訪問による教育課程」（89 人）、「下学年及び下学部の教科代替の教育課程」（59 人）の順となっていた。「幼稚部のねらい及び内容を取り入れた教育課程」の回答はなかった。

図 22 は、病弱養護学校中学部における教育課程別生徒数の割合を示したものである。

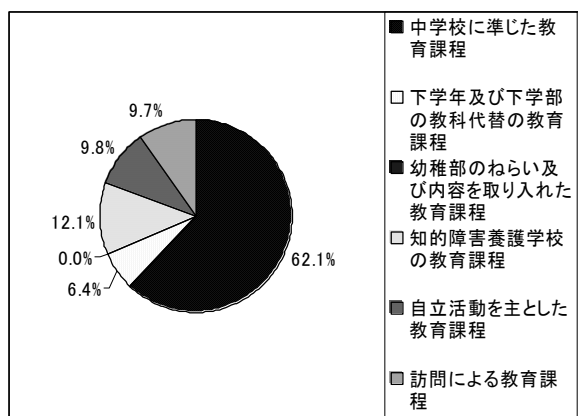


図 22 病弱養護学校中学部における教育課程別生徒数の割合

最も生徒数の多い「中学校に準じた教育課程」において、平均年間授業時数は、1年生では、「国語」（平均 142.57 時間）、「社会」（平均 119.16 時間）、「外国語」（平均 115.9 時間）の順に多かった。3年生では、「数学」（平均 128.29 時間）、「国語」（平均 126.05 時間）、「外国語」（平均 120.09 時間）の順に多かった。

3. 高等部（普通科）

病弱養護学校高等部普通科における教育課程別の生徒数については、「高等学校に準じた教育課程」（432 人）、「知的障害養護学校の教育課程」（210 人）、「自立活動を主とした教育課程」（135 人）、「訪問による教育課程」（105 人）、「下学年及び下学部の教科代替の教育課程」（56 人）の順に多かった。

図 23 は、病弱養護学校高等部普通科における教育課程別生徒数の割合を示したものである。

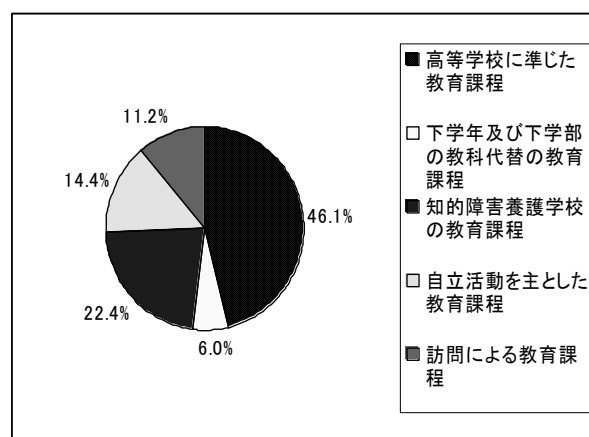


図 23 病弱養護学校高等部普通科における教育課程別生徒数の割合

4. 高等部（専門学科）

回答はなかった。

5. 学校全般にかかわる事項

表 6 は、病弱養護学校における単一障害学級で自立活動以外で個別の指導計画を作成している児童生徒の割合を示す。小学部、中学部、高等部の合計でみると、「各教科において作成」している児童生徒数が最も多く、次いで「総合的な学習の時間において作成」している児童生徒数が多かった。

図 24 は、病弱養護学校における学習評価の課題に関する自由記述回答の分類結果を示す。「評価の規準」をあげている回答が最も多かった。

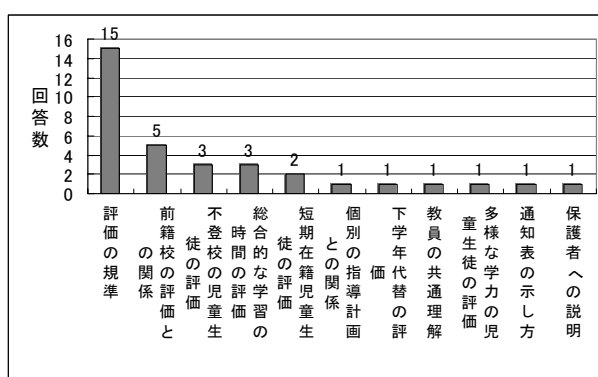


図 24 病弱養護学校における学習評価に関する課題

図 25 は、病弱養護学校における教育課程の課題に関する自由記述回答の分類結果を示す。「個に応じた教育課程の編成」をあげている回答が最も多く、次いで「総合的な学習の時間の在り方」、次いで「重度・重複障害児の教育課程」をあげている回答が多かった。

表6 病弱養護学校における単一障害学級で自立活動以外で
個別の指導計画を作成している児童生徒の割合

	小学部	中学部	高等部			合計
			普通科	専門学科	専攻科	
単一障害学級の児童生徒数（人）	314	369	261	0	0	944
各教科において作成している児童生徒の割合（％）	29.0	17.1	13.4	—	—	20.0
道徳において作成している児童生徒の割合（％）	3.5	4.1	0	—	—	2.8
特別活動において作成している児童生徒の割合（％）	3.5	4.1	7.3	—	—	4.8
総合的な学習の時間において作成している児童生徒の割合（％）	9.6	11.9	16.5	—	—	12.4
領域・教科を合わせた指導において作成している児童生徒の割合（％）	0.3	10.6	0.4	—	—	4.3

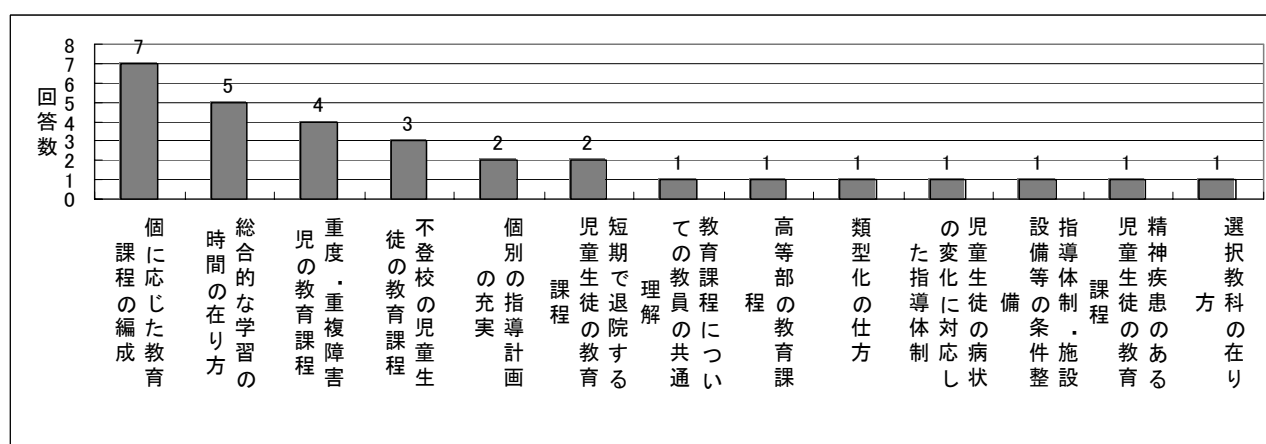


図25 病弱養護学校における教育課程に関する課題

Ⅷ 盲・聾・養護学校の教育課程の実施状況のまとめ

1. 教育課程別の児童生徒数から見た実施状況

1) 盲学校

盲学校においては、小学部では小学校に準じた教育課程で教育を受けている児童が最も多く（41.8%）、中学部でも中学校に準じた教育課程で教育を受けている生徒が最も多かった（48.0%）。高等部普通科では、やはり高等学校に準じた教育課程で教育を受けている生徒が最も多かった（60.3%）。

下学年あるいは下学部の教科代替の教育課程は、小学部 15.8%、中学部 19.3%、高等部普通科 13.7%となっており、知的障害養護学校の教育課程は、小学部 27.6%、中学部 18.1%、高等部普通科 17.7%となっていた。また、

自立活動を主とした教育課程は、小学部 14.2%、中学部 13.5%、高等部普通科 8.1%となっていた。盲学校に在籍する児童生徒のニーズに応えるため、教育課程も多様なものとなっていることがわかる。

2) 聾学校

聾学校においては、小学部では小学校に準じた教育課程で教育を受けている児童が最も多く（63.4%）、中学部でも中学校に準じた教育課程で教育を受けている生徒が最も多かった（59.4%）。高等部普通科でも、高等学校に準じた教育課程で教育を受けている生徒が最も多かった（79.4%）。

下学年あるいは下学部の教科代替の教育課程は、小学部 22.3%、中学部 29.2%、高等部普通科 10.8%となっていた。

また、知的障害養護学校の教育課程は、小学部 11.7%、中学部 11.2%、高等部普通科 8.6%となっていた。

一方、自立活動を主とする教育課程で教育を受けている児童生徒は少なかった(小学部 1.7%、中学部 0.1%、高等部普通科 1.2%)。

このように、聾学校では、小学校・中学校・高等学校に準じた教育課程で教育を受けている児童生徒がかなり多いといえることができる。

3) 知的障害養護学校

知的障害養護学校においては、小学部では知的障害養護学校の小学部の各教科の目標・内容による教育課程で教育を受けている児童が最も多く(79.6%)、中学部では知的障害養護学校の中学部の各教科の目標・内容による教育課程で教育を受けている生徒が最も多く(80%)、高等部普通科では知的障害養護学校の高等部の各教科の目標・内容による教育課程で教育を受けている生徒が最も多かった(80.8%)。

一方、自立活動を主とした教育課程で教育を受けている児童生徒は、小学部で 13.8%、中学部で 11.4%、高等部普通科で 7%となっており、知的障害養護学校では、自立活動を主とした教育課程で教育を受けている子どもの割合は、小学部で最も多いことがわかる。

4) 肢体不自由養護学校

肢体不自由養護学校においては、小学部では自立活動を主とした教育課程で教育を受けている児童が最も多く(50.3%)、中学部でも自立活動を主とした教育課程で教育を受けている生徒が最も多かった(40.5%)。高等部普通科では、知的障害養護学校の教育課程で教育を受けている生徒が最も多くなっており(37.1%)、自立活動を主とした教育課程で教育を受けている生徒(34.3%)を上回っていた。

知的障害養護学校の教育課程で教育を受けている児童生徒は小学部・中学部でもかなり多くなっていた(小学部 27.7%、中学部 30.8%)。

このように、肢体不自由養護学校では、自立活動を主とした教育課程で教育を受けている児童生徒が多いが、これは在籍する児童生徒の障害が重度化していることと対応しているものと考えられる。また、肢体不自由養護学校では、知的障害養護学校の教育課程で教育を受けている児童生徒もかなり多く、特に高等部普通科では、自立活動を主とする教育課程で教育を受けている生徒よりも多かった。肢体不自由養護学校では、知的障害養護学校の教育課程へのニーズもかなり高くなっていると考えられる。

しかし、その一方で、小学校・中学校・高等学校に準じた教育課程で教育を受けている児童生徒は、小学部で 9.9%、中学部で 12.1%、高等部普通科で 9.3%で

あり、下学年あるいは下学部の教科代替の教育課程で教育を受けている児童生徒は、小学部 5.7%、中学部 8.6%、高等部普通科 11.9%となっていた。

また、訪問による教育課程で教育を受けている児童生徒は、小学部 6.2%、中学部 7.8%、高等部普通科 7.4%となっていた。

このように肢体不自由養護学校では、在籍している児童生徒の障害が重度化している一方、教科指導についてのニーズもかなりあり、教育課程へのニーズは広範なものとなっていることがわかる。

5) 病弱養護学校

病弱養護学校においては、小学部では小学校に準じた教育課程で教育を受けている児童が最も多く(50.4%)、中学部でも中学校に準じた教育課程で教育を受けている生徒が最も多かった(62.1%)。高等部普通科では、やはり高等学校に準じた教育課程で教育を受けている生徒が最も多かった(46.1%)。

下学年あるいは下学部の教科代替の教育課程は、小学部 4.8%、中学部 6.4%、高等部普通科 6%となっていた。

また、知的障害養護学校の教育課程は、小学部 13.8%、中学部 12.1%、高等部普通科 22.4%となっており、高等部普通科ではかなり高い割合となっていた。

自立活動を主とした教育課程は、小学部 14.2%、中学部 9.8%、高等部普通科 14.4%となっていた。

訪問による教育課程は、小学部 16.7%、中学部 9.7%、高等部普通科 11.2%となっており、他の学校種別に比べると高い割合となっていた。

病弱養護学校では、在籍する児童生徒の障害が多様となっており、教育課程へのニーズも多様化していることがわかる。

2. 個別の指導計画の作成と教育課程

重複障害のある児童生徒の指導及び自立活動においては、個別の指導計画の作成が行われているが、単一障害学級において自立活動以外で個別の指導計画を作成している児童生徒については、盲学校では、小学校、中学校、高等部の合計でみると、各教科において作成している児童生徒が最も多かった(13.1%)。

聾学校でも、小学校、中学校、高等部の合計でみると、各教科において作成している児童生徒が最も多かった(18.8%)。

知的障害養護学校では、小学校、中学校、高等部の合計でみると、領域・教科を合わせた指導において作成している児童生徒が最も多かった(63.1%)。知的障害養護学校では、領域・教科を合わせた指導において、個別の指導計画の作成が活発に行われているというこ

とができる。

肢体不自由養護学校では、小学校、中学校、高等部の合計でみると、各教科において作成している児童生徒が最も多かった(51.3%)。肢体不自由養護学校では、各教科において個別の指導計画を作成している割合はかなり高いといえることができる。

病弱養護学校でも、小学校、中学校、高等部の合計でみると、各教科において作成している児童生徒が最も多かった(20%)。

以上のように、盲学校、聾学校、肢体不自由養護学校、病弱養護学校では、各教科において作成している児童生徒が最も多く、知的障害養護学校では、領域・教科を合わせた指導において個別の指導計画の作成が活発に行われているといえることができる。

3. 学習評価に関する課題

調査結果をみると、いずれの学校種別でも、「評価の規準」を課題としてあげている回答が最も多かった。これは、絶対評価の導入に伴い、適切な評価を行うためにはどのような規準で評価をしていけばよいのか、ということが課題となっている学校が多いことを示している。絶対評価における評価規準については、今後とも継続的に検討していく必要があると考えられる。

4. 教育課程に関して課題となっていること

教育課程に関して課題となっていることについては、盲学校、聾学校、肢体不自由養護学校、病弱養護学校では、「個に応じた教育課程の編成」が課題となっているという回答が最も多かった。これらの学校種別では、個々の児童生徒のニーズにきめ細かく対応していくために、いかに個のニーズに対応し得るような教育課程を編成し、実施していくかということが、大きな課題となっていることが示唆される。すなわち、学校の教育課程としての枠組みと個への対応ということについて、どのように調和をはかっていくかということが、これらの学校で直面している課題であると考えられる。

知的障害養護学校では、「総合的な学習の時間の在り方」が課題となっているという回答が最も多かった。学習指導要領の改訂により「総合的な学習の時間」が新たに設定され、知的障害養護学校の教育活動においてどのように取り組んでいけばよいかが課題となっている学校が多いものと考えられる。

(渡邊 章・竹林地 毅・牟田口 辰己)